

# 歴史地震探索

## まちあるきガイド その1

名古屋大学減災館～自由ヶ丘～覚王山編



# まちあるきの前に

## 減災館で事前学習しよう！

### 名古屋大学減災館

名古屋大学減災館は、建物全体が防災・減災の学びの場になっています。1階は見て触れて学ぶ減災ギャラリー、2階は調べて学ぶ減災ライブラリーとなっており、様々な体験や調べ物など、防災・減災を学ぶための教材が充実しています。歴史地震についての展示や資料もあり、今日のまちあるきのヒントも散りばめられています。減災館で事前学習をして、まちあるきのでかけましょう！



#### 減災館へのアクセス

地下鉄名城線名古屋大学駅2番出口を出て、四谷通りを本山方面にそのまま直進します。

郵便局を過ぎ、押しボタン式の信号のある横断歩道を過ぎるとしばらくして右側に減災館が見えます。

減災館の開館時間は13:00～16:00（入館は15:30まで）です。休館日は原則、日曜、月曜、第2・第4火曜、祝日ですが、変更になることがありますので、減災館のホームページ（<http://www.gensai.nagoya-u.ac.jp/>）でご確認ください。

減災館外観



減災館2階



減災館1階



### 歴史地震アーカイブ



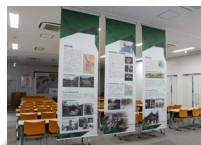
所在地：減災館2階  
歴史地震アーカイブには、昔の地震のことをまとめた資料がたくさんあります。市町村史などのデータベースも閲覧できます。

### 今昔まっぷ

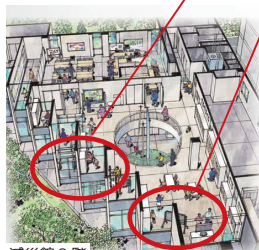


所在地：減災館2階  
今昔まっぷではタッチパネルを用いて、標高図や航空写真、昔の地図、浸水想定図などを、現在の地図と比較したり重ね合わせたりすることができます。

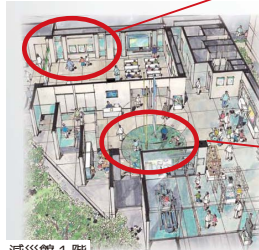
### 減災ホール（ロールスクリーン）



所在地：減災館1階  
減災館1階の減災ホールには、この地域に関係の深い地震についてまとめたロールスクリーンがあります。この地域の地震の年表も見ることができます。



減災館2階



減災館1階

### 減災ギャラリー（空中写真）



所在地：減災館1階  
減災館1階の減災ギャラリーには、この地域の空中写真があります。今日まちあるきするルートもたどってみることができますよ。

# 事前学習が済んだら

## 減災館からスタート地点の自由ヶ丘駅へ

大きくカーブした坂道をずっと  
道なりに行くとう自由ヶ丘駅に到着!

猫が洞通 2 の信号を左折

1,000m

猫ヶ洞池

猫が洞通りをぶらぶら♪  
雑貨屋さんもあります。

1,000m

猫が洞池

猫が洞池

昔の上池がいまも残っています。  
尾張名所図絵の土手(下左・絵)といまの土手(下右・写真)を見比べてみましょう。

本山の交差点で  
斜め右方向へ

減災館から道路に  
出たら右手方向へ

1,000m

Gensaikan

自由ヶ丘駅

Jiyugaoka Sta.

電車

地下鉄名城線で名古屋大駅から  
自由ヶ丘駅へ(約5分)

バス

名古屋大学バス停から猪高車庫行きで  
地下鉄自由ヶ丘バス停へ(約10分)

徒歩

左の地図と次ページの見どころ参照  
(約3km,40分)

名古屋地方気象台

白いレーダードームが目印の名古屋地方気象台がこんなところに。。。

桃巖寺

巨大な緑色の大仏が  
ふいに現れます。

# とうがんじ 桃巖寺

桃巖寺は織田信長の弟・信行が父・信秀の菩提を弔うために建立したお寺で、弁財天のお寺として親しまれています。境内には台座も含めた高さが15mにもなる緑色の名古屋大仏が鎮座しています。街中にふいに現れる緑色の大仏は強烈です。大仏のほかにも、樹齢100年のクスノキでできた、日本一の大きさとも言われる直径1mの巨大木魚や、ユニークなぬむり弁天(1/1-5と5/7,8には御開帳が行なわれます)があります。



## 名古屋地方気象台

屋上の白い球、降水観測のためのレーダードームが目印の名古屋地方気象台は、明治23年に名古屋一等測候所として創設され、中央気象台発表の天気予報の伝達・掲示と1日7回の観測を開始しました。その後、明治26年からは名古屋地方天気予報の発表を開始し、大正12年に現在の場所に移りました。観測開始以来の気象資料を無料で閲覧することができるほか、職場体験学習や課外活動としての気象台の見学も受け付けています。



## 猫が洞池

猫が洞池は、江戸時代に農業用のため池として作られた池で、山崎川の源流のひとつです。もとは上池(現在の猫が洞池の位置)と下池(上池の南西側)がありましたが、昭和10年頃に下池は水田に変わりました。前のページの絵は江戸時代に描かれた尾張名所図会の猫が洞池で、2つの池があることが見てとれ、真ん中の土手は現在の土手によく似ています。猫が洞池は、濃尾地震で決壊したという説もあります。



# 歴史地震探索まちあるきルート

## 自由ヶ丘～覚王山

道のりと所要時間

まちあるき距離：約 2.5km

まちあるき時間：1 時間 30 分から 2 時間

### 今日のまちあるきの基礎知識

#### 濃尾地震

濃尾地震は明治 24 (1891) 年 10 月 28 日に発生した内陸直下型の地震で、マグニチュードは 8.0、直下型の地震としては国内最大級の地震です。震源は現在の岐阜県本巣市付近の根尾谷断層で、岐阜県、愛知県を中心に 7,000 名あまりの死者が発生し、建物の全壊は 140,000 棟に上りました。

#### 大正関東地震（関東大震災）

大正関東地震は大正 12 (1923) 年 9 月 1 日に関東地方で発生したマグニチュード 7.9 の海溝型地震です。東京本所の陸軍被服廠跡地では大規模な火災で 40,000 人近い方が亡くなり、全体の死者数は 100,000 人を超えました。名古屋で非常に多くの被災者の受け入れを行っており、各地に記念碑や供養堂が残されています。

#### 昭和東南海地震

昭和東南海地震は昭和 19 (1944) 年 12 月 7 日に南海トラフで発生した海溝型地震で、マグニチュードは 7.9、東海地方を中心に強い揺れと津波が発生しました。学徒動員で全国から軍需工場に動員され働いていた学生が多数亡くなりましたが、戦争中で情報統制が敷かれ、連絡もままならなかった状況でした。



# 関東大震災惨死者供養塔

関東大震災惨死者供養塔は、震災から約3年後の大正15(1926)年8月に建立されたもので、背面には世話人の、右側面には寄付者の住所氏名が記載されています。世話人の住所を現在の住所と対応させると、中区上前津、中村区名駅、東区筒井町、熱田区金山などとなっており、寄付者も当時の名古屋市中区、西区、東区の方々です。震災に際して、愛知県では官民挙げての対応を行っており、15万人余りの被災者を受け入れました。詳細はわかりませんが、こうした対応にあたった人々による建立であるかも知れません。



地下鉄自由ヶ丘駅2番出口を出て正面の信号を渡り、緩やかな坂を上がります。(写真上)



坂を上り切った正面が名古屋商業高等学校の敷地で、すぐ右に墓地への入り口の階段があります(写真中)。これを上がります。



階段を上がるとフェンス際に通路があります(写真下)。通路を10mほど進むと、右手に「関東大震災惨死者供養塔」があります。



# 橘宗一少年の墓

橘宗一少年は、明治大正のアーネキスト大杉栄の甥で、関東大震災の6年前の大正6(1917)年にアメリカ移民の貿易商 橘惣三郎と大杉の妹あやめとの間に生まれました。一家はアメリカに住んでいましたが、大震災の直前にたまたま日本に帰国しており、少年は、大震災に乗り大杉が軍部に殺害された日暮事件に巻き込まれて殺されてしまいます。お墓は父親の惣三郎が、宗一少年が10歳になる日に建立したもので、一時所在不明になっていましたが、1972年頃に日泰寺近くの草むらで発見され、日泰寺内に墓地が整備されました。



再びフェンス際の通路を進むと20mほどで角に小さなお地藏さんが見えます。ここを右に入ります。(写真上)



しばらく進むと交差する階段にぶつかるので、この階段を左に下ります。(写真中)



下り切ったところにブロックと2つの看板があり、そこで右斜め手前方向へ。細い通路(写真下)を進むと、10mほどで左手に少年のお墓が見えます。



## 関東大震災横死者追悼之碑

関東大震災横死者追悼之碑は、大正 12 (1923) 年 12 月の建立で、地震が発生した日から数えるとはぼ 100 日目にあたり、百か日法要に合わせて建てられたものと考えられます。背面には「名古屋市区蒲焼町青年団 世話人町役員一同」とあり、地元青年団が主体となって建立したもののようです。蒲焼町(うなぎのお店がたくさんあった?)は現在の中区錦三丁目付近にあたります。なお、最初の碑「関東大震災惨死者供養塔」の世話人、寄付者の住所も中区や東区を中心とした地域でしたが、東区蒲焼町の方は含まれていません。



ブロックと看板の場所まで戻り、直進方向の広い通路を進みます。(写真上)



広い公道に出るとすぐに信号のある交差点があります。進入禁止の看板のある細い道路のほうへ入っていきます。(写真中)



しばらく道なりに進むと、お地藏さんとお墓の集まった一角が右手に見えます。この一番奥に追悼之碑があります。(写真下)



## 冤死同胞慰霊碑

冤死同胞慰霊碑は、第二次世界大戦時における朝鮮人犠牲者の霊を供養するために建立されたものです。昭和の東南海地震の際、三菱重工道徳工場で6名の朝鮮女子挺身隊の方が命を落としましたが、当初三菱重工による殉職碑には、その名前が刻まれていませんでした。その後「悲しみを繰り返さぬようにここに真実を刻む」の碑が建立され(現在は南区豊田の名南ふれあい病院の敷地内)、朝鮮女子挺身隊の6名を含む、道徳工場で命を落とした57名が供養されました。冤死同胞慰霊碑にも、この6名の朝鮮人犠牲者の名前が刻まれています。



道路に戻り道なりに進むと、左手に日泰寺奉安塔の脇を通る通路の入口(写真上)があります。ここを入ります。



しばらく緩やかに下りながら進むと右手に建物が見えます(写真中)。建物を過ぎて右に曲ると奉安塔の通路に出ます。



右手に奉安塔への階段(写真下)があります。上りきって左に曲ると小屋があり、ここに慰霊碑があります。



## 関東大震災供養堂

関東大震災供養堂は日泰寺奉安塔の入口付近に建つ御堂で、関東大震災の犠牲者を供養したものです。建設は「萬燈会創立二十周年記念事業」として行なわれました。萬燈会は覚王山の山内及びその東方へ電燈を施すことを目的とした団体で、供養堂は、この萬燈会により寄付が集められ創設されています。内部には釈迦の立像が祀られ、その後に寄付金に応じて祖先の法名を刻んだ位牌が並んでいます。なお、現在でも震災の日の9月1日には御堂の扉を開けて供養が行われています。



先ほど上ってきた階段に戻ります(写真上)。階段を下り、さらに緩やかな通路を下ります。



途中、左手に名古屋電灯の発展に尽力した福澤桃介の記念碑があります。そのまま正面入口(写真中)まで歩き、入口を出て歩道に出ます。



歩道に出たら左に曲がります。少し進むと左手に供養堂があります。(写真下)



## 濃尾大震災横死者供養塔

濃尾大震災横死者供養塔は、高さ2m余りの角柱型の供養塔で、碑面には「七千百十五人精霊 濃尾大震災横死者供養塔」と刻まれており、濃尾地震における死者を供養したものです。現在は尋盛寺の敷地内に存置されています。左側面には「岐阜県海津郡西江村帆引 内田じょう子」とあり(西江村は現在の海津市の一部)、岐阜の方によって建立されたもののようです。同じ方が建立した震災供養塔が大垣市西崎町にもあり、こちらは明治41(1908)年に震災17回忌を機に建立されたものです。



姫ヶ池通1の交差点で反対側の歩道に渡り、歩道沿いを道なりに歩くと、「故陸軍歩兵上等兵…」と書いた背の高い墓標が見えます。(写真上)



墓標を過ぎると右手に入る通路があります。白い小屋が目印です。(写真中)



通路に入りつきあたりを右に曲がります。10mほどで、右側に供養塔があります。(写真下)



# 日泰寺

明治31(1898)年にインドでお釈迦様の遺骨が発見され、この遺骨は仏教国であるシヤム(暹羅、現在のタイ)の王室に寄贈されました。当時のシヤム国弁理公使 稲垣満次郎は国王に分与を懇願し、下賜を受けることとなります。この遺骨を安置するために、超宗派の寺院として建立されたのが日泰寺(当時は日蓮寺、シヤムからタイへの改名により日泰寺に改称)です。官民一致の熱心な誘致運動の結果、明治37(1904)年に覚王山日蓮寺が誕生しました。ご本尊はシヤム国国宝の釈迦金銅仏一体で、お釈迦様の遺骨は奉安塔に安置されています。



姫ヶ池通1の交差点に戻り、そのまま信号を渡って左側の歩道を進みます。(写真上)



しばらくすると駐車場があり、駐車場を過ぎたところで左に曲がります。緩やかにカーブした道を道なりに進みます。(写真中)



つきあたりを右に曲がります。20mほど進むと日泰寺の東の入口があります。門に入り、階段を上ると本堂の前に出ます。(写真下)



# 日泰寺参道

日泰寺の参道には様々なジャンルのお店が並んでいます。カフェやレストラン、食堂に、おでんをつつきながらお酒を飲めるお店、また、ケーキ屋さんやチーズとはちみつの専門店もあります。アクセサリや食器など、雑貨も充実しています。東山通りに出ると、名古屋名物鬼まんじゅうのお店もあります。覚王山では、季節ごとにそれぞれ春祭、夏祭、秋祭が催され、10月から11月にかけてはまちがアートでいっぱいになる覚王山参道ミュージアムも開催されます。毎月21日には縁日も開かれ、いずれも盛り上がりを見せています。



本堂から山門を見た写真です(写真上)。山門を出ると、日泰寺の参道になります。



途中緩やかにカーブします(写真中)。参道には様々なジャンルのお店が並びます。



寄り道をしながら参道を進むと大通り(東山通り)に出ます。左に曲がると覚王山駅です。(写真下)

まちあるきお疲れ様でした。





## おわりに

関東大震災後、名古屋の人々は、たくさんの被災者を温かく受け入れました。今回のまちあるきでご覧いただいた関東大震災にまつわる碑や史跡の数々は、当時の人々の気持ちの表れであるといえます。

さて、現代の日本で、東京で大きな地震が起こったらどうなるでしょうか。関東大震災当時より、さらに多数の被災者を受け入れる必要があるかも知れません。さらには、この地域でも南海トラフ地震の発生が迫っていると言われています。備蓄品を用意しておくなど、普段の生活から少しずつ余裕をもつことを意識し、また耐震補強や家具の転倒防止を進め、地震に備えましょう。

### さらに学びたい方は…

関東大震災についてご研究されている、名古屋大学武村雅之教授の関東大震災関係の書籍が参考になります。また、「地震と防災」も防災に必読です。

- ・「関東大震災を歩く：現代に生きる災害の記憶（吉川弘文館、2012）」
- ・「未曾有の大災害と地震学：関東大震災」（古今書院、2009）」
- ・「天災日記：鹿島龍蔵と関東大震災」（鹿島出版会、2008）」
- ・「手記で読む関東大震災」（古今書院、2005）」
- ・「関東大震災：大東京圏の揺れを知る」（鹿島出版会、2003）」
- ・「地震と防災」（中公新書、2008）」



### 歴史地震探索まちあるきガイドブックその1 —名古屋大学減災館～自由ヶ丘～覚王山編—

作成：減斎の会

名古屋大学減災連携研究センター

受託研究員 山本 真一郎（愛知県）

発行：名古屋大学減災連携研究センター

平成 27 年 5 月

まちあるきの感想や、ガイドに対するご意見などございましたら、  
[gensaisan2014@gmail.com](mailto:gensaisan2014@gmail.com) までお寄せください。